

素晴らしい須走を知りたい!

「素晴らしい隊」養成講座 第5回講座概要

第1部：座学 文学のなかの富士山

■日時

令和3年11月13日(土) 9時~12時

■場所

須走地区コミュニティセンター

■講師

○田代 一葉 富士山世界遺産センター 学芸課准教授

■講義概要

1. 富士山リテラシーの形成

(1) 山部赤人の富士山の長歌・反歌

- 山部赤人は、生没年不詳、8世紀前半に聖武天皇の時代に宮廷歌人として活躍した人である。万葉集に千葉で詠んだ歌があることから東国へ旅をしたことが知られる。万葉集の山部赤人の歌だが、「田子の浦ゆ…」の歌の前に長い歌・長歌が付いている。万葉集の時代の特徴として、古今集以降の長歌は急速に衰退するが、五・七という二句を連ねていく。長さはどれだけ長くてもいい。長歌形式が非常に盛んに作られた。「田子の浦ゆ」の歌も、歌だけを詠むのではなく、本来は長歌と合わせて鑑賞する。
- 長歌は、五七調のリズムの良さ、万葉集の時代(上代)の言葉なので、聞き馴染みのない音や言葉があるが、それらは耳に心地よかったり、想いを感じさせるような不思議な力があるように思う。
- 富士山は、静岡県、山梨県のものなのかが議論になるが、歌枕の世界では、万葉集の時代から富士山はまぎれもなく駿河の歌枕と決まっている。これがその証拠となる歌でもある。
- 内容は、天地開闢の時代から富士山という山は高く尊く、太陽の光さえ隠すほど大きく偉大である。白雲も富士山の辺りを通るのをはばかりようである。この素晴らしい富士山の事を語り継ぎ、言い継いでいこう、というような決意表明のようなところで終わる。この長歌に対して、返し歌が皆さんご存知の歌「田子の浦うち出でて見ればま白にぞ 富士の高嶺に雪は降りける」である。現代語訳は、「田子の浦越しに、打ちいでて見てみると、真っ白に富士の高嶺には雪がふっていることだ」。「田子の浦ゆ」の「ゆ」は、平安時代になるとすでに分からない言葉になってしまっている。「ゆ」は、「〇〇を通して」、「〇〇越しに」という意味なので、駿河湾越しにという事なのかもしれない。田子の浦を通して富士山を見ると、という意味になっている。
- 現在の田子の浦は、富士市にあるが、地名は動くものであり、町村合併などが行われ、古い地名がなくなっている。上代の田子の浦は、富士川の西側の地帯、駿河湾の奥まった湾の西側の蒲原や倉沢あたりだと思う。この地が田子の浦であったという静岡県側の古い時代の記録と山部赤人の歌に田子の浦とあり、どうもそこから富士山が見える地だという事だけ当てはめると広範囲になるかもしれない。この辺りで富士山が見えて、きれいな所は薩埵峠。古代の東海道の道を調べると、江戸時代の後期になるまで海岸線の道は危険で通れないので、薩埵峠越えをした方が危なくない。潮が高いと海岸線が通れないので、薩埵峠を抜けて下りてきて、見たのかと言われている。
- 田子の浦が富士川の西側で、そのどこかであることは定説としてあった。田子の浦は西伊豆に「田



子」という地があり、そこではないかという事をおっしゃった細川先生がいる。ただし、細川先生は、国文学の先生ではなく、鯨塚の専門調査をしていて思い立ったそうだ。細川氏の主張は、「赤人の詠んだ田子の浦は、現在の西伊豆の田子である」。地名が一緒であるから思いついたと思う。内容は、平城京から出土した木簡に西伊豆の田子の名が書かれたものがある、ということ。木簡データベースで引いてみたら、木簡の表記は「伊豆国那賀郡丹科郷多具里」ということで、木簡自体は存在する。木簡は朝廷に税を納める際の荷札のようなものなので、ここに地名が書いてあるのはその地名がこの時代にあったというのは証明できるが、赤人が行った事に繋がるものではない。2番目に、赤人は物産調査でこの地を訪れ、船上からみた富士山を詠んだのであろう、とある。先ほど、赤人は東国に下ったことがあると言ったが、それはその時代なので朝廷の御用で行ったと思うが、赤人が物産調査、諸国の特産物の調査をしたという事は全く知られていないので、この事も唐突すぎて受け入れがたい。3番目に、現在の説の田子の浦では富士山との距離が近すぎる、ともおっしゃっている。細川さんは非常に万葉集の注釈をよく読んでいらっしゃると思うが、なぜか富士市の田子の浦を想定して考えているようだ。また、富士市にしても富士川西側にしても近すぎることはあるか？東海道を下ってくる際に西伊豆の田子に着くまで富士山を見る機会はたくさんあったのでは？敢えてそこで詠まなければならなかった蓋然性をお示しいただければもう少し説得力があると思うので、定説を覆すのは難しいのではないかと思います。

- 参考として西伊豆からの富士山の写真である。近いという事はないし、ここもきれいな富士山だと思うが、あえてここという決め手に欠けるのではないかと思います。
- もう一つ「田子の浦にうち出でてみれば白妙の富士の高嶺に雪はふりつつ」という歌がある。これと先ほどの「田子の浦ゆ」とどちらが正しいのか聞かれることがあるが、どちらも同じ歌。「田子の浦ゆ」という言葉が分からなくなっているといったが、平安時代以降の人たちが赤人の歌を何とか詠もうとして自分たちのセンスに合ったちょっとしたアレンジを加えたのがこの歌。「ゆ」がなくなるので、田子の浦に出てという赤人、歌う人の姿勢、位置が変わっているという事が一つある。「田子の浦に出て、仰ぎ見ると、真っ白な富士の高嶺には雪がしきりに降っているよ。」という歌。あまり深く考えず、美しい歌だと思っていたが、何かがおかしい。真っ白な富士山の高嶺に雪がしきりに降っている光景は、雲に覆われていて見ることはできない。すごく淫靡的、新古今集らしい美しいまとめになっている。実際の光景にはない歌になっている。

(2) 都良香「富士山記」

- 平安時代前期の漢詩人、都良香が書いた。富士山頂の様子が書かれている初めての書。平安時代前期、9世紀末に書かれているというのも特色。
- 頂上は甌のように中がくぼんでいる。「蹲虎の如し」という記述は、虎石が今でもあり、今と比較しても何ら遜色のない記述が続いている。「山頂に白衣の美女二人あり 山の頂の上に並び舞う…」とあり、山頂に美しい女の人が舞を舞っている、というような不思議な事が書かれている。都良香が本当に見てきた今と比べても何ら変わらないことと、このような仙人や不思議な話しが混在しているのは「富士山の記」の特色と言える。これは、室町時代になって成立した謡曲の「羽衣」あたりに影響を与えたのではないかと思います。

(3) 『伊勢物語』第九段東下り

- 非常に有名。昔男という言い方が普通。在原業平になぞらえる男性が都落ちの場面で初めて富士山の姿を見たところ。5月の末に雪がいっぱい降ったままになっている。富士山がこんな暑い時期に雪が残っているのだろかとあり、その高さが比叡山(都で山と言えば比叡山)を二十ばかり重ねあげ

たようである。形は塩を積むと富士山のように円錐形になるが、その塩尻のようであると記している。

- ―赤人の歌や、都良香の漢文、伊勢物語の第九段の話などが都の人たちにとって富士山を知るために非常に有力な情報になっていた。この後、いろいろな富士山に対する情報が出てきた時、これらを引用し富士山を描写する。例えば、伊勢物語ではこう書いてあるが本当はこうじゃないかという書き方や、その歌を部分的に引用して自らの歌にするなど、富士山に関わる情報が拡大再生産され、繰り返し新しく作り出されていく文学の様子が見て取れる。

2. 富士を見ぬ旅

松尾芭蕉『野ざらし紀行』

- ―松尾芭蕉は、江戸時代前期の俳人。伊賀国(現在の三重県)出身で、江戸に出て俳諧師として活躍した。伊賀の出身と一日に歩く距離がおおかったので忍者ではないかという説が昭和30年、40年に突如出てきた。しかし、信ぴょう性がないと文学の方では言われている。37歳の時に隠棲した深川の芭蕉庵からは、富士山が日々眺められた。『野ざらし紀行』は貞享元年(1684年)に江戸から郷里伊賀上野を経て、翌年夏に帰庵するまでの紀行文。奥の細道も紀行文、芭蕉は紀行文を何種類も書いたが、「野ざらし紀行」は初めての紀行文という事でも重要である。
- ―葛飾北斎「富嶽三十六景」のうち「深川万年橋下」では、真ん中の辺りに富士山が見える。芭蕉はこの近くに住んでいたのでこのような感じで遥か遠くに富士山を見ていたと思う。江戸時代の江戸っ子は、富士山は江戸の名物だと思っていた。富嶽三十六景など江戸から見える富士山をたくさん描いており、非常に愛着を持っていた。理由は、本当に富士山が好きという事もあるが、都(京都)は富士山は見えないが、東都(江戸)は富士山の見える都だという誇りがあり、それが故により富士山に対する愛着が増していったのだろうと言われている。
- ―「野ざらし紀行」の解説。箱根の関(箱根は東海道の難所)を越える日は、心づもりをしたり、少し重い気持ちになったなか、雨が降っていた。箱根は芦ノ湖から富士山がきれいに見える名所だが、雲に隠れていて見えない。霧や時雨が降り、富士山が見えないが、そんな日も面白いではないか、という風に芭蕉は詠んでいる。
- ―ちり(=芭蕉の弟子の千里)が「深川や芭蕉を富士に預け行く」と詠んでいる。この芭蕉は、植物の芭蕉。松尾芭蕉が旅に出るので植物の芭蕉を富士山に預けて行く、という言い方をしている。こちらは富士山に対する非常に近い感じ、隣の人に植物の世話を頼む気やすさでお願いしているような微笑ましい句が詠まれている。
- ―「富士川のほとりを行に、三つ計なる捨子の哀げに泣く有り」。芭蕉が富士川(本当に富士川だったかどうかは分からないという説があるが)のほとりに三歳くらいの捨て子がいて、泣いている光景を見て、たもとにあった食べものを投げてやるという句がある。江戸時代というのは、色々と生活が大変だったことなどを芭蕉は野ざらし紀行の中で記していて、ただ風雅な紀行文ではないということが理解できる。
- ―芭蕉はこの旅で富士山を見られなかったが、同じ箱根の関で見る事が叶った。「箱根の関越て目にかかる時やことさら五月富士」の句を残している。訳は、五月雨の足柄峠で富士山を見るなど、無理と諦めていたが、幸運なことに秀麗な五月富士を見ることができた。旧暦で、五月は丁度、梅雨の季節。梅雨に見ることができると、という幸福感が表れている。この句が『芭蕉翁行状記』に入っているが、芭蕉はこの旅で関西に行くが、この旅で病没した。恐らく富士山を詠んだ最後の句になると思われる。

3. 外国人の見た富士山

ケンペル『江戸参府紀行』

- －ケンペルは元禄3年(1690)、江戸時代前期に長崎出島のオランダ商館長付医師として赴任したドイツの博物学者兼医師。約2年間の滞日中に2回江戸参府に随行し、日本で様々な事を見て、調べ、『日本誌』などをあらわした。この書により、多くのヨーロッパ人が日本を知ることになった。
- －ケンペルが非常に富士山を讃えており、この文章を取ってきた。「その姿は円錐形で……一番高い山頂にはいつも雪が残っている。」と書いている。世界中で一番美しい山、と称えているところがすごいと思う。雪がいつまでもあることや、白い雪のマントを着ているという見立てをしている所、富士山をよく見て、よく観察したうえで文章を記している事が分かる。例えば、このほかにもオランダ商館に来た外国人や、明治になると旅行家等が外国から来て、富士山について記しているが、中でもケンペルは早い方の人物である。

4. 近代文学と富士山

正岡子規と太宰治

- －太宰治は「月見草」でイメージがあると思うが、正岡子規も非常に富士山が大好きであった。歌も句も両方作り、両方に残っていることから分かる。
- －正岡子規は、明治時代の俳人であり、歌人。愛媛県出身で、帝国大学を中退したあと、日本新聞社に入社。俳句の革新運動を展開していくが、若い時期から脊椎カリエスと肺結核になり病床にあったが、短歌の革新運動、新しい俳句を作るという事を提唱し続けた人物。

子規と富士山

- －子規には『富士のよせ書』という全3冊の本がある。手書きのもの。二人でやったものだが、全170種の古典書物から富士山に関わる記事を書き抜いている。万葉集や伊勢物語、どうしてその書物に書き写すことができたのだろうという珍しい本までたくさん書き抜きを作っている。歌集『竹乃里歌』は、草稿も含めて、約40首の富士山に関わる短歌が収録されている。俳句では全23,647句中120句あまりの富士山を詠んだ句があることが分かっている。非常に多作なので、埋もれてしまうような気がするが、これから見ていただくと、単なる富士山が題材だけではなく、自分にとって特別なものであったことが分かる。

子規の富士山の短歌

- －1 首目：「万国の博覧会に持ち出せば 一等賞を取らん不尽山」。万国博覧会に富士山を出品することがあるならば、もちろん一等賞を取るに決まっている、非常な無邪気に富士山をたたえた歌。
- －2 首目：「足たゝば不尽の高嶺のいたゞきを いかづちなして踏み鳴らさまし」。子規は病気で寝たきりの期間が長かったことにかかる句。足が立たなくなり、富士登山など夢のまた夢になったが、富士の山頂に行けたら雷が鳴るように頂を踏み鳴らしたいものだ、という歌。
- －3 首目：「富士に登らずして故郷に帰る 格堂に贈る 富士のねに咲ける薊を吉備にある 親に見せんと君思はずや」。格堂は、一緒に俳句とやり、子規が目をかけていた人。格堂が故郷の岡山に帰るに際して、どうして富士山に登らなのかと、この歌を贈っている。富士の根に咲くアザミをどうして親御さんに見せてあげようと君は思わないのか、と言っている。正岡子規は富士山に対して知識を持っていたので、フジアザミのことを言っている。

子規の富士山の俳句

- －「見渡せば富士迄つゞく田植哉」富士山の裾野にある田んぼのことだと思ったが、子規はこの歌を詠んだ春に友達を水戸に旅に行っている。関東平野に田植えとその先にある富士山を詠んだのでは

- ないかと書いてある。関東平野は平地が続く、「見渡せば」の初句がその方が生きてくると思う。
- －「ぼんやりと大きく出たり 春の不二」は、説明が要らないくらい、霞の中に大きく春の富士山がそびえている感じがし、非常にのんびりとした句。
 - －「漱石の松山に行くを送る」という前書きのある句。「寒けれど富士見る旅は羨まし」は、病気が悪化した子規が、漱石が松山に行く途中で富士山を見ることに対してうらやましく思っているという事を素直に詠んだ句。

太宰治の「富嶽百景」

- －太宰治は、昭和時代の小説家。『走れメロス』『人間失格』など非常に多くの作品を残している。
- －「富嶽百景」のあらすじ。創作活動にも実生活にも行きづまった主人公(太宰治)が、「思いをあらたにする覚悟」で井伏鱒二のいる御坂峠の天下茶屋に逗留する。富士山に対して、あんな山のどこがいいのだ、と思いながらも、「くたばるほど」富士山に向き合い、人々の温かい心や親切に接するうちに、次第にこわばっていた心も解け、人生の伴侶を得る大きな転機が訪れる。次第に富士山に対する主人公の感情も変化し、天下茶屋を離れる際には、富士山に御礼を言うまでになっていった、という内容。主人公、太宰が付き合っていた女性に裏切られ、心身ともにボロボロな状態で心機一転するために師である井伏鱒二のいる天下茶屋で色々な体験をするというものだが、自分の心が上向いている時は富士山がきれいに見え、そうでない時は、悪態をついたり、あんな山どこがいいのだという思いを持ったりして、「私と富士山」というようなところがこの小説にはあり、自分の思う富嶽百景だろう。
- －一番有名な「月見草」が出てくる場面は、そこまで富士山に対して心を開いていおらず、いいと思ったり、そうでなかったり波のように動いている時期。太宰は甲府からのバスに乗って、天下茶屋に帰る所だったが、そこで乗り合わせた老婆が月見草を見つけ、いろいろなことを考えたところ。健気な姿の月見草と、どっしりした富士山の対比が太宰の心をつかんだのだと思うが、そこではなく月見草に自分を投影していくところがあったのではないかと思う。

5. まとめとして

- －都から遠く離れた富士山は、古代の日本では地方の一山として知られることのない山であったが、東国に旅した人々の文学によって、和歌や物語によって崇高で気高い山としてイメージが定着する。
- －赤人の歌や『伊勢物語』では、初めて見た富士山に驚きを持って伝えており、富士山を遠くから見た体験を持つ孝標女や阿仏尼も間近にみる富士山を再発見していた。
- －日々、富士山を見ていた芭蕉は、富士山が見えないことをおもしろがり、ドイツ人のケンペルは世界中で最も美しい山であると称えている。
- －子規は富士山に対して強い憧れを抱いており、太宰は愛憎相半ばする感情の揺らぎを作品で表現している。
- －旅を通して、間近に見る富士山の姿に圧倒されつつも、その感動を残そうとしたのがこれらの文学であり、「芸術の源泉」としての富士山の価値の一つであると思われる。
- －文学における富士山は、1000年以上の歴史を持つので、実は絵画よりも長い。「芸術の源泉」というと、どうしても絵画を思い浮かべるが、絵画の題材に文学は供給しており、絵画より先輩であるので、ぜひ文学にも親しんでほしい。